



## 未来へつなぐ春日山 豊かな奈良の自然を伝える

文：垂水 恵美子 (JEEF 職員)

奈良の中心部から東に位置する、春日山原始林。都市の近くにありながら今も原生の姿を残す「鎮守の森」だ。特別天然記念物にも登録されている春日山の自然と歴史を未来につなぐための活動をしているのが、杉山拓次さん。自然を愛でること、自然を意識しながら暮らすことはその人の人生を豊かにする―その思いを、春日山のフィールドを活用して人々へ伝えていく。

杉山さんは東京出身、二十代半ばまでは演劇を志した。その後地球のこどもの制作アルバイトを経て約十年JEEFで環境教育に携わり、仕事を通して環境について学んだ。職場結婚し、子ども二人を育てていたが、長男が小学生になる頃、これからの子育てをどこでするか悩み、心機一転、妻の実家がある奈良へ移住を決めた。

移住直前、奈良市が行っていた

起業家育成プログラムに参加し、エコツアーを春日山で行う事業計画を作ったのが、今の活動の原点だ。奈良の観光は歴史や文化が中心だが、面白い自然があることを広めたかった。その頃、「立ち上げの仲間にならないか」と誘われたのが、現在も事務局長を務める「春日山原始林を未来へつなぐ会」だった。活動を続けるうちに、環境やまちづくり、学校教育・ESDなど幅広い仕事に関わるようになった。

多彩だが、「自然を意識して生活することで人生が豊かになる」ことを伝えたい、それが軸足だ。気づけば移住して九年が経っていた。

三年ほど開催している「春日山原始林アートプロジェクト」は、樹齢六百年の倒木を使った作品を通して、直接森に来ていない人にもアプローチできる取り組みだ。より多くの人に課題を知ってもらい、

行動してもらおうこと。そのための裾野を広げるものとして、大きな意義を感じている。

春日山というひとつのフィールドを通して、自分の立ち位置が分かった気がする」と杉山さんは語る。奈良は歴史のある地域だ。大正末期に春日山を調査し、特別天然記念物の登録に尽力した研究者の孫と会った時、過去から現在の自分を見て、さらに未来へつながる道筋が見えた。

「友人にも『いい顔してる。奈良に来てよかったな』と言われました」と、生き生きと話す杉山さんの笑顔が印象的だった。



春日山原始林アートプロジェクト 2021  
京都府民ホールロビーでの展示の様子